



家畜市場でセリ市にかけられる羊？（グラフ山口ー農林 527）

文書館 もんじょかん 動物記



書庫に棲む動物たち

⑨

未

ひっじ

昭和戦後の農山漁村新生運動と 羊の増産

1. 大正～昭和戦前期の 県内羊数

『山口県の統計百年』（山口県統計課 1968）によれば、大正 11 年（1922）時点、山口県内での羊飼育数は 65 頭でした。現在知りうる最も古いデータです。

こののちしばらく、飼育数は 100 頭を越えず、戦争が激しくなる昭和 15～20 年によやく 110～150 頭程度でした。

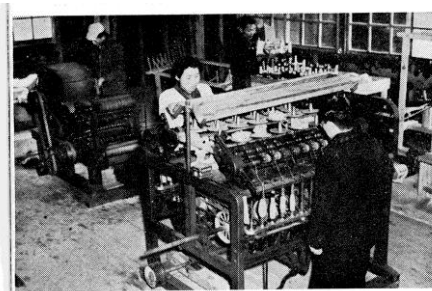
2. 農山漁村新生運動と めん羊

終戦後、山口県は荒廃した農山漁村の振興と民主化を図るため、昭和 25 年から「農村新生運動」をスタートさせました（昭和 27 年より「農山漁村新生運動」に改称）。

この運動の中で、畜産振興策のひとつとして、めん羊や山羊の導入が

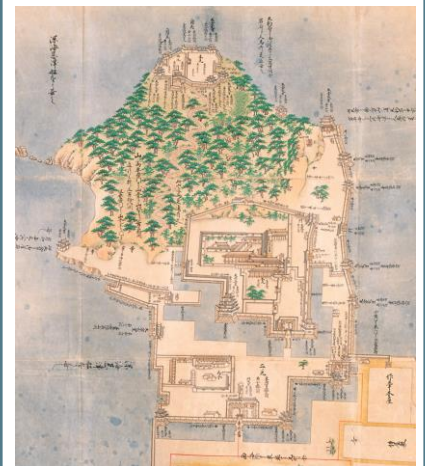
推奨されました。導入が比較的容易で、羊毛による衣料の自給、山羊乳による栄養改善などで利点が大きいとされたのです（山口県農村振興対策審議会編「農村新生計画樹立の手引」行政資料 1950 年代 経済 2）。

積極的にめん羊を導入し、「県下一のめん羊の村」となったのが厚狭郡二俣瀬村（現宇部市）です。めん羊の放牧を行うとともに、農協との協力で村営紡毛工場も建設しました。



二俣瀬村の村営紡毛工場
（「新生運動の歩み」〈行政資料 1950 年代農業 17〉より）

羊皮が張られた萩城の太鼓



江戸時代、萩城の時打櫓には時報を伝える太鼓が置かれていました。

江戸時代に著された地誌「萩古実未定之覚」によると、この太鼓には、羊皮が張られていました。もとは山口の香積寺にあり、胴内には大内義弘の銘があったといえます。

羊皮の張られた太鼓、どんな音がしたのでしょうか。

3. めん羊数の激増・激減

新生運動スタートから間もなく、県内めん羊の飼育農家戸数および飼育数は飛躍的に増加します。運動以前、昭和 24 年には 142 戸、203 頭であったものが、同 27 年には 600 戸、928 頭となり、翌 28 年には 2,190 戸、3,180 頭と急激な増加をみせました。以後増加は続き、ピーク時の昭和 34 年には飼育数 7,150 頭、戦前の約 50 倍にもなりました。戦後の衣料原料の窮迫が追い風になったとされています（山口県「家畜および鶏の改良増進計画」行政資料 1960 代農林 566）。主産地は厚狭郡、吉敷郡、都濃郡、玖珂郡などでしたが、次第に錦川流域地域でも盛んになりました。

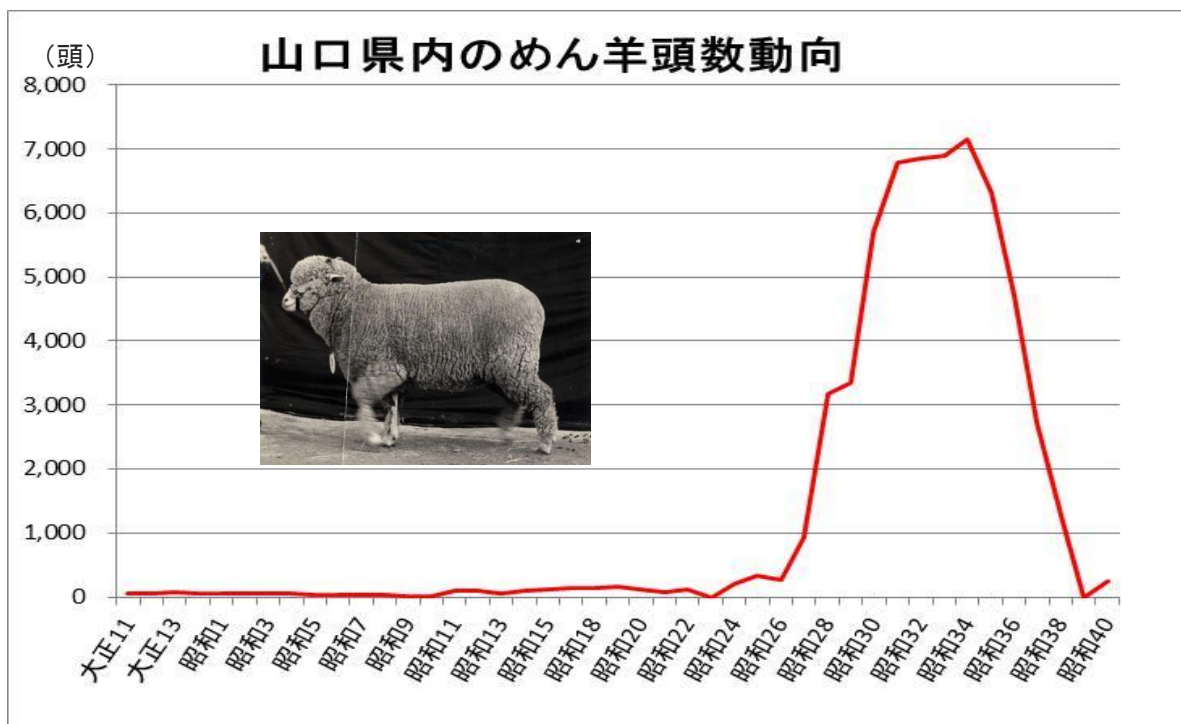
ところが、その後は減少いちじるしく、6 年後の昭和 40 年には 178 戸、240 頭にまで減少しています。

「ひつじの夢」は、はかなく消えてしまいました。



山口県民室発行の「県政だより」昭和 30 年（1955）1月号。

未（ひつじ）年にあたるこの年、県内のめん羊頭数は 5,690 頭でした。



当館蔵『山口県統計年鑑』『山口県の統計百年』より作成